2023（令和 5）年度　博士学位論文要旨

初田章子

本論文は、傑出したフルート奏者で指揮者・作曲家でもあったフィリップ・ゴーベールのフルート演奏法における「しなやかさ（souplesse)」の技法について考察するものである。彼が出版に関わった 2 種のフルート教則本と彼のフルート作品を同時期のパリ音楽院フルート科卒業試験課題の変遷の中で概観し、その歴史的な位置付けを行うとともに、彼による「しなやかさ」の技法を具体で示すことを試みた。

本論は三つの章で構成される。

まず第一章では、ゴーベールが生涯にわたり多面的な活動を行っていたことを俯瞰した。彼はフルートにおける近代フランス楽派の父とみなされているポール・タファネルに師事し、その教えを誰よりも近くで受け継いだ。作曲ではローマ大賞 2 位を受賞し、指揮活動とともに音楽全体に対する大きな視座を持って戦間期フランスの音楽界を支えた。

第二章では、2 種の教則本からゴーベールの教えを取り出して考察した。まず、師タファネルが最新のベーム式フルートの更なる開発に関わり、フルートの機能とレパートリーを拡大したこと、フルート教育においては古典の作品やヴァイオリン・ピアノの作品を教材として導入し、演奏法として音の吹き分けを指導していたことを確認した。その上で、ゴーベールによる教育と、師の教えの継承と発展について考察した。彼は師よりも一歩踏みこんだ言葉で演奏法の助言を記し、身体と呼吸の扱いについて「しなやかさ」を重視し、それらが実際に習得できるための練習曲を作曲して、2 種の教則本にそれぞれ掲載した。また、フルート学習者に自身の音と状態を聴くことの大切さを説いた。これらのことから、彼にとって「しなやかさ」がきわめて重要であったことを論じた。

第三章では作曲家ゴーベールにおけるフルートの「しなやかさ」について考察した。まず 19 世紀後半のパリのサロンにおけるピアノ音楽について概観し、20 世紀初頭のパリのピアノ音楽教育において身体と音楽表現両面での「しなやかさ」を求める傾向があったことを確認した。その上で、フルート作品に対する「しなやかさ」がどのように現れて行ったのかを、パリ音楽院のフルート科卒業試験課題の変遷を通して考察した。結果として 1900 年以降の卒業試験課題曲には、それ以前と比べて作品の室内楽への接近傾向が見られた。それらを踏まえ、ゴーベールの「しなやかさ」がどのように彼のフルート作品にあらわれていったのかを示し、また彼のフルート作品において、ピアノ譜がフルートの弱音の音質を活かすためにどのように工夫されているかを整理した。最後に、ゴーベールが後期フルート作品において身体と呼吸の深い「しなやかさ」を前提とした作品を作曲していたことを確認した。

以上から、ゴーベールがタファネルを通して最新の楽器開発の恩恵を受け、超絶技巧と幅広い音楽観を受け継いだこと、身体と呼吸を扱う「しなやかさ」を技法として重視し、それを習得するための自作の練習曲を教則本に掲載し、フルート作品の中でも活かしていったことが明らかになった。新しい機構の楽器と表現のために、奏者の側にもこれまでにない身体と呼吸の訓練が必要になったのである。

ゴーベールの述べる「しなやかさ（souplesse）」は、柔軟性、適応力、に加えて関節を硬直させない、といった意味合いを含む。これらを通した身体と呼吸の扱いは、豊かな音色からごく僅かな弱音までを操り、指や舌の敏捷さとその持続を導く。これは奏者自身の技巧を根本から深める技法でもある。ゴーベールによる「しなやかさ」の度合は奏者にとっての楽器と身体の習熟度を表すことにも繋がった。すなわち、近代以降のフランスのフルート技術と表現に不可欠な身体と呼吸の扱いであるとともに、フルート教育とその音楽においても極めて重要な技法となっていったのである。